

C

Case Study

(株)ピコハウス



ピコハウスは、世界初の独立系のDVDオーサリングスタジオとして、また現在は、国内一の規模を誇る、ワールドワイドなDVDオーサリングスタジオだ。DVDオーサリング事業として、非常に多くのタイトルをプレスまで受注している。システム環境を始め、クオリティの高い作品を作り上げる独自の技術や今後の市場展望などを、企画営業部部長の宮山明彦氏と制作技術部課長の本間紀夫氏に聞いた。

S HighQuality-Pico

ピコハウスは1987年に新潮社により設立され、そのビデオ製品を編集するポストプロダクション業務からスタートした。当初のビデオソフト制作やマルチメディアソフトの企画から販売、MPEGエンコーディング、DVD、CD-ROM、ビデオCDのオーサリング、レプリケーションまでのコンテンツ制作と、トータルに請負うことができるプロダクションだ。「ピコ」という1兆分の1と表す数字用語を社名に持つことからピコハウスのキーポイントが画像の「Quality」であり、画質にこだわりがあることが伺える。事実、1994年には、アナログ業務からビデオCDオーサリングへ参入すべく、MPEG-1エンコード技術で名を誇る米PVR社(PacificVideoResources)との業務提携をしており、そのノウハウを取得するだけでなく、エンコーディングの画質向上の技術開発にも協力した。この当時から、次世代規格-つまりMPEG2市場の幕開けには期待をしており、当時すでにDVDオーサリング事業へ移行することは決定していたと言う。そして、DVD規格が決定する前に、いち早くDVDオーサリング事業へ参入していった。

S DVDオーサリングシステムの導入経路

DVDオーサリングシステム第一号を導入したのは、1996年6月。当時ピコハウスで活躍していたビデオCDオーサリングシステムは、ダイキン工業のScenarist1であったため、DVDオーサリングシステムも、その流れを引継ぎSGI版のScenarist2が選ばれた。

また、MPEG-2エンコーダには当時唯一Scenarist2と互換性が取れていたZAPEX社のZX-2000AME、AC-3エンコーダには、ZX-Resoundが導入された。

現在は、8システム(Scenarist2×4、ScenaristNTx4+Scenarist1×1)が休むことなく稼働している状態だ。Scenarist2は、Scenarist1を継承しているため、続けて使用しやすい環境にあったこと、また開発元が日本企業であるため、迅速で充実されたサポート体制を受けられるということも、Scenaristを選択した理由になるだろう。また「海外のScenaristユーザーとの互換性」も、ピコハウスならではの導入要因だ。とういうのも、ピコハウスでは、アジア圏からの受注も多く、過去にも先方からの依頼でScenaristデータを同梱した納品実績もあるからだ。

また、制作したタイトルの英語版を制作したいという米国Scenaristユーザーからの依頼もあったという。

「やはりScenarist1時代から使いこなして、システム自身に馴染み深いことから、DVDオーサリング事業には、Scenarist2を使おうと決めていた。ScenaristではDVD規格をすべてサポートしているから、弊社のように、DVD規格を生かした細かい機能まで盛り込んだコンテンツ制作をする側からすると、各メーカーのDVDプレーヤーで動作できるかが確認とれるというオーサリングシステムは非常に助かる」

「各社のプレイヤーに同じディスクをかけても同じように動作するとは限らない。あるプレイヤーだけが特別なエラーがでてしまうこともある」と、制作技術部課長の本間氏は説明する。その上、ピコハウスではプレス後の問題を防ぐために、テスト検証用のプレイヤーを揃え、「どうオーサリングする」と「どのメーカーの機種でバグが発生する」かまでも把握している。

オーサリング事業の実績で先行 独自技術で他社と差別化





ピコハウスではDVDならではの規格を活かし、クライアント側のニーズに応え、独自性を持たせた機能を含めたタイトルが多い。それがまた、ピコハウスが誇る柔軟な制作体制とMPEG-1時代から培ってきた技術力の賜物である。例えば、同じエンコーダを使っていても画質や制作クオリティに大きな差がでてくる。高ビットレート時にはあまり差がみられないが、低ビットレート時には、ブロックノイズやモスキートノイズを軽減するノウハウが、より良い画質を保つポイントとなる。

また、DVDプレイヤー第一世代機のオーサリング当時は、エミュレータがなかったために、何回もマスタリングをした苦い経験もあるようだ。

これらのエンコーディング技術をはじめ、他社ではできないオーサリング技術を習得してきている事実、そしてビデオCD時代からの経験や、システムでいろいろな機能にチャレンジした経緯が、今現在のクライアントから受ける高い評価の元となっているという。そういったことから、他オーサリングスタジオからの複雑なタイトル制作などの依頼も多いようだ。独自の技術といえば、「我々は、メモリープログラムファンクションと勝手に呼んでいる（本間氏）といった、あるリミットを持たせたコンテンツのみをループ再生させるような技術や、オリジナルコントローラーを持ったプレイヤーに対して、DVD-Rのプログラム再生を、IDによってプロテクションを持たせるなど、同じScenaristを使用しDVDオーサリングをしている他社でもできない、オリジナリティあふれるノウハウを持っている。また、クライアントからも評価の高い技術力養成の裏側について本間氏は次のように語った。

「弊社はDVDを始めとするデジタルメディアに特化しているということもあって、タイトル毎に担当をアattendしている。エンコード、デザイン、オーサリングなど各工程で作業を分担してしまうと、場合によっては作業のブランクが生じ、仕事が中断されてしまうことがあるからだ。また、スタッフ全員が同様の業務をこなすので、お互いのノウハウを共有し、技術力を高めることができる。タイトル毎、厳密に言えば、各クライアント毎に担当者を決めることで責任が明確になり、作業のブランクを回避し、作業の効率化ひいては納期の短縮化に繋がるという。

S タイトルシェアは？

DVD規格が正式に決定し、DVDプレイヤーが出荷された96年12月に日本で発売されたDVDタイトルのうち2タイトルは、ピコハウスがオーサリングを担当した。

1999年12月までに制作した数は800タイトル以上にもおよび、現在月平均40以上のタイトルを制作しているという。「他のオーサリングスタジオ

株式会社ピコハウス(PICO HOUSE Co., Ltd.)

東京都新宿区矢来町70

TEL. 03-3266-8855

FAX. 03-3266-8871

<http://www.pico-house.co.jp>

に比べると、当社は業務用のシェアが高いと思う。例えば博物館などのデータ保存関連やSPツールや展示会映像など。去年のモーターショウの展示ゾーンDVDは、だいたい弊社で制作した。しかし、99年4月以降、市販タイトルのレギュラー本数も増えて、映画やアニメ、アダルト、それから趣味などの市販用が45%近くの割合を占めるようになってきた（企画営業部長 宮山氏）

最近では、話題作のサザンオールスターズ SPACE MOSA のオーサリングを担当した。

展示会や販促、インタラクティブ、訪問販売ツールといった業務用は約55%程度を占め、業界においてもそのシェアが高いのが特徴であるという。DVD-Rの購入枚数は、数にして月70-100枚でおそらく日本トップクラスではないかと宮山氏は言う。

S フルサービス～ポストプロダクション事業も

ピコハウスでは、MPEGエンコードとオーサリングが業務のメインではなく、トータル的にDVDサービスを提供できるのも特徴的だ。もともとアナログ制作業務も行っているため、ビデオ素材の映像編集、動画メニュー制作や音声編集、そして静止画や字幕の制作も行うことができる。ピコハウスではデジタルベータカム、D-2、1インチアナログベータカムなどさまざまなビデオフォーマットを受け付けることができる。ビデオ編集設備に加えて、音楽もナレーション録音も可能なMA室も完備している。社内にメニューやインタラクティブ機能のシナリオ作成、レーベルやパッケージデザインを担うマルチメディア・エキスパートもいる。

また、顧客の指定がない限りマスタリングやプレスサービスについても、国内のDVDライセンスであるプレス会社との業務提携により、リーズナブルな価格で提供できるという、フルサービスで展開している。

S DVD市場の期待

最近のDVD話題としては、3月のプレイステーション2の発売であろう。これをDVDの第一次ピークとみるピコハウスでは、DVD規格をフルに活かし、既存にないような新しい機能を持たせたタイトル制作を手掛けていきたいという。

現在の8システムでもフル稼働させているピコハウスでは、需要が拡大していけば、随時オーサリングシステムを増設していく予定である。しかし、新規参入会社が相次いでいるため、オーサリング価格体系が崩壊しつつあるのも現状だ。ピコハウスでは、今後の市場の見通しとして、独自の技術力を持ちクオリティ高いオーサリング制作を提供する側と、クライアントの使用目的が異なることで、ローエンドシステムでまかなえる側とで市場のすみわけが成されると考えている。

また、ブロードバンドがエンハンスされるだろう近い将来、独自のインタラクティブ性が活かせるWebDVDの可能性にも注目している点も、一歩先駆けていると言えるだろう。

